

ラテンとイスラムの 接点の再考

—— ラテン世界の多面的把握 ——



松 井 謙一郎

2010年代に入ってからユーロの不安定な状況は、「(南欧諸国を中心とする)ラテンの世界」が震源であった。その中で南欧諸国は市場の強い圧力に晒されながら構造改革を余儀なくされてきた。しかしながら、社会的な反発も強く、成果が出るのに時間を要する構造改革への取り組みは容易ではない。現在ユーロを取り巻く情勢は落ち着きを取り戻しているが、依然として「ラテン的な経済体質」はユーロの潜在的なリスク要因となっている。一方で、中南米も成長センターとして位置付けられてはいるが、一次産品依存型経済が潜在的なリスク要因として見なされている。

筆者は「ラテンの世界を見る視点」の論考^①で、超長期的な時間軸から見たラテン世界のプラスの側面に焦点を当てながら、固定的になりがちなネガティブなイメージを改めて見直すべき旨の問題提起を既に行った。これと併せて、ラテンの世界を南欧・ラテンアメリカを中心に、統合的に把握する必要性についても問題提起した。本稿の基本的な問題意識は、ラテンの世界をより多角的に捉えるという観点から、南欧諸国を中心にイスラム世界との接点を改めて整理する事にある。

2000年代以降、イスラムの世界への関心は専ら「西欧文明との対立」の側面に向けられるようになった。イスラム世界では2010年代以

降の「アラブの春」で当初は民主化の進展が期待されたものの、現在はこの動きが逆に政治的な混迷を深める結果につながったというマイナスの評価が主流になっているように思われる。我々が「西欧文明」「欧米諸国」という用語を使う際に想定するのは、主としてアングロサクソンの世界ではないだろうか。現在の世界ではアングロサクソンの価値観が政治・経済・文化のあらゆる面で非常に大きな影響力を持っている事は確かであり、それがイスラム的な価値観と対立・衝突する側面がある事は否定できない。一方で、歴史的には、西欧でイスラム世界と長い時間にわたって多くの接点を持ってきたのは、南欧諸国を中心とするラテンの世界である。その関わり方の歴史は対立・衝突といった形で簡単に総括できるものではなく、ラテンの世界にとってイスラム世界との関係は、現在も模索が続いている。

本稿の目的は、ラテンの世界の視点に立脚しながらイスラム世界との関係の模索を整理する事で、ラテンの世界をより多角的に把握する事にある。本稿の構成は以下の通りである。1.で、ラテンとイスラムの接点としての地中海圏の重要性を考える。これを踏まえて、2.では、フランス・スペイン・イタリア・ギリシャの4ヵ国を事例としてイスラムとの接点を整理した。この中では、トルコなどの大国だけでなく、マル

松井謙一郎：拓殖大学 政経学部 教授（政策・メディア博士）、ラテン・アメリカ政経学会 監事

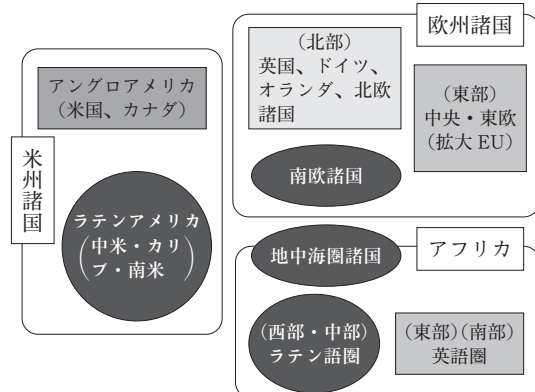
タ、キプロスなどの小国も重要な位置づけを占めている点にも焦点を当てた。これらを踏まえて、3. で総括を行った。筆者のイスラム世界についての知見は限られたものだが、これらの具体的な事例を考える事で、ラテンの世界をより多面的に把握する事につながればと考えている。

1. ラテンとイスラムの接点としての「地中海圏」

「ラテンの世界を見る視点」の論考では、ラテンの世界をラテン系の言語が公用語として使われている地域の総体として捉えた。それは南欧諸国やラテンアメリカだけでなく、アフリカにおけるラテン語圏諸国（フランス語・ポルトガル語）や地中海圏諸国も含んでいる。図表1にあるように、南欧諸国の視点から見ると、「アフリカ」「中近東」といった単純な地域区分よりは「地中海圏」という捉え方がより現実的で重要である。古代のギリシャ・ローマ文明は地中海文明として分析される事も多い。一方のイスラムの世界については、「重層的な広がり」という事で特徴付けできよう（図表2）。

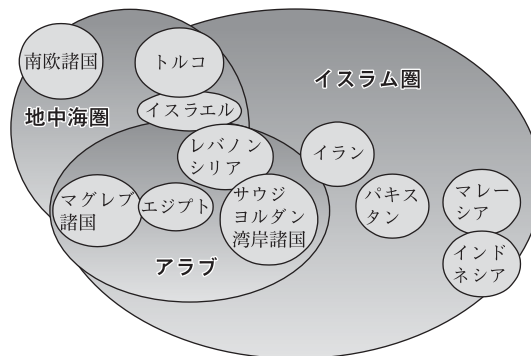
アラブの世界は、産油国を中心とする東部地域と西部地域のマグレブ諸国に分けられる。イスラム世界は、このようなアラブの世界を中核としながら、イラン・パキスタンなどの西アジア、インドネシア・マレーシアなどの東南アジアまで拡大していく。

図表1 ラテンの世界と地中海圏の位置付け



(出所) 筆者作成

図表2 イスラム世界の重層的な広がり



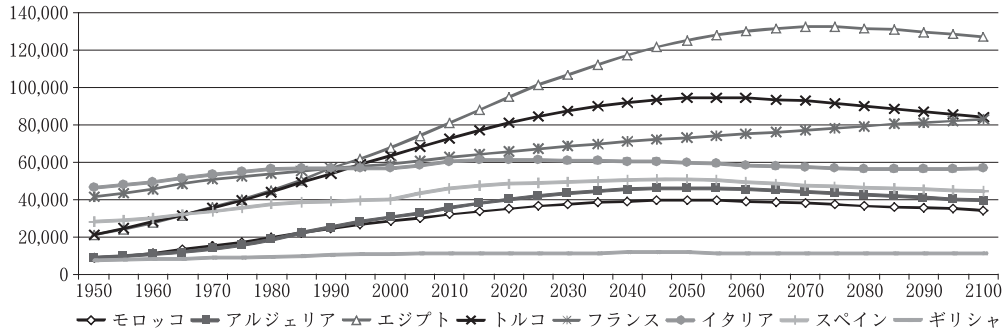
(出所) 筆者作成⁽²⁾

ラテンとイスラムの世界の関係は、世界史の教科書的に言えば西欧とオリエントの対峙という事になる。ギリシャ文明の東方拡大やペルシャとの衝突、ローマ帝国の東方への拡大、ローマ帝国の分裂と東方文化との融合、アラブ世界の拡大と西欧との衝突、オスマントルコとの対峙などの歴史上の事象において、ヨーロッパでは南欧諸国が主役となってきた。このような両世界の接点は、マグレブやトルコ、南欧諸国を含めた地域である「地中海圏」が舞台となってきた。本稿でも、このような地中海圏の枠組みに改めて注目しながら、ラテンの世界を捉える事が基本的な問題意識となっている。

南欧諸国にとって地中海圏は潜在的な成長市場として大きな意味を持っている。超長期的な時間軸での人口予測（図表3）を見ると、南欧諸国の人口は横這いの状況となっている。これに対して、人口の大幅増加が見込まれるエジプトや、現時点でも人口大国となっているトルコ、モロッコ・アルジェリアなどのマグレブ諸国の人口を合計しただけでも、南欧諸国の人口を大きく凌駕する計算となる。このような観点から、2010年代以降のユーロ危機と南欧諸国の経済停滞の中で、地中海圏の重要性が改めて注目されている。

一方で、2000年代に入ってから、2001年の同時多発テロの事件を契機に、欧州ではイスラム系の移民の存在が大きな社会問題となってきた。2000年代中頃には、「ユーラビア」という造語⁽³⁾に象徴されるように、欧州の将来がア

図表3 地中海圏主要国の人口予測



(出所) 国連のデータベースより筆者作成
(単位) 千人

ラビア世界からの移民によって大きく左右されるという一種の脅威論も高まってきた。このような議論に対しては、アラブ移民の存在を抽象化して脅威として位置付けている旨の批判もなされてきた。いずれにしても、2000年代以降の欧州各国では移民政策の在り方が政治・政策面での大きな問題となり、近年はアラブの春の混乱に伴う北アフリカからの難民の問題がクローズアップされている。本稿の限られた紙面で、これらの問題を包括的に扱う事は困難だが、以下では具体的な接点について4カ国を事例として整理してみたい。

2. 欧州の地中海圏諸国とイスラムの接点

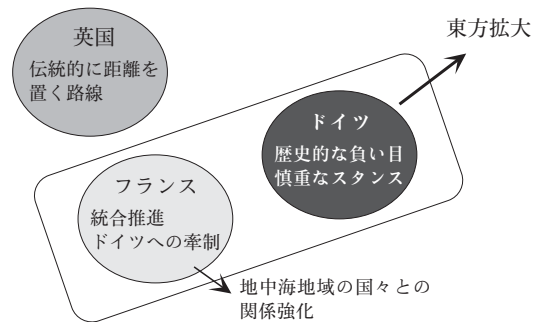
以下では、欧州の地中海圏の4カ国⁽⁴⁾とイスラムの具体的な接点を考えていきたい。

(1) フランス (欧州の南方拡大主導、アフリカのイスラム圏との関係の難しさ)

欧州の拡大に対する仏独英の主要3国のスタンスについて比較すると、図表4の通りである。フランスにとっては旧植民地としてのつながりが深いアフリカや地中海圏が戦略的に重要な地域として位置付けられ、欧州の南方拡大の主導がフランスの外交にとっての重要な柱となってきた。

その代表的な枠組みが、EU加盟国と北アフリカ・中東地域の地中海沿岸諸国によって構成

図表4 欧州拡大と主要3国のスタンス



(出所) 筆者作成

され、2008年に発足した「地中海のための連合 (Union for the Mediterranean)」である。この枠組みの原型は、1995年に成立した欧州と地中海圏諸国の関係強化を意図した「バルセロナプロセス」(欧州・地中海パートナーシップ)である。フランスの大統領サルコジはバルセロナプロセスをより進める形で、地中海沿岸諸国のみによる「地中海連合」(Mediterranean Union)を提唱した。しかしながら、この構想はEUの南北分断につながると懸念するドイツやEUへの加盟を目指すトルコなどの反発を受け、全EU加盟国が参加するバルセロナプロセスの一環として「地中海のための連合」が創設されたという経緯がある。

フランスの場合には、アフリカ地域がイスラムとの接点という意味で地中海地域と並んで重要である。フランスは中部アフリカ地域を植民地にしてきた関係もあって、図表5にあるように言語・通貨面でのプレゼンスは現在でも非常に大きい。但し、その関係は一方的な影響力の

図表5 北部・中部アフリカ地域でのフランスの
プレゼンス（公用語・通貨）

北部アフリカ （公用語はアラビア語との併存）	アラビア語が公用語	エジプト、リビア、スーダン、エリトリア
	アラビア語とフランス語が公用語で併存	（マグレブ3国）モロッコ、チュニジア、アルジェリア（北部と中部アフリカの中間地域）ジブチ、モーリタニア
中部アフリカ （公用語はフランス語が主、共通通貨CFAフラン）	中部アフリカの西部地域	（西アフリカ諸国中央銀行発行のCFAフラン使用）セネガル、マリ、コートジボワール、トーゴ、ベナン、ブルキナファソ、ニジェール
	中部アフリカの中央地域	（中部アフリカ諸国銀行発行のCFAフラン使用）チャド、中央アフリカ共和国、カメルーン、ガボン、コンゴ共和国

（出所） 各種資料より作成

行使ではなく、アフリカ地域のイスラム圏諸国との関係で難しいかじ取りを迫られている。特に、北アフリカの中でもアルジェリアとの関係は、同国の独立以降容易ではない事は周知の通りである。最近では中央アフリカ国内でのキリスト教徒とイスラム教徒の対立を背景に、フランスは同国へ軍事介入を行っている。

一方、フランス国内では移民との摩擦の問題が2000年代以降大きな問題になってきた。2004年にはフランスの公立学校におけるイスラム教徒の学生のスカーフの着用禁止が内外で大きな波紋を呼んだ。この中で、宗教の習慣と憲法・法律との関係の在り方、移民との共存問題など様々な問題がクローズアップされた。フランス社会では2000年代以降、移民への対応が特に重要な問題となってきた。

（2）スペイン（モロッコとの関係の難しさ、アラブ世界との「文明の連帯」の模索）

スペインにとってイスラムの世界とのつながりは深く、中世ではアラブ世界の中心的な地域として繁栄していた時期もあり、南部のアンダルシア地域ではアラブ文化の影響が強く残っている。特に、隣国モロッコとの間では、旧スペイン領である西サハラの帰属問題を巡って外交上の摩擦が長く続く等、関係の舵取りが歴史的に難しい問題となってきた。またスペインへの

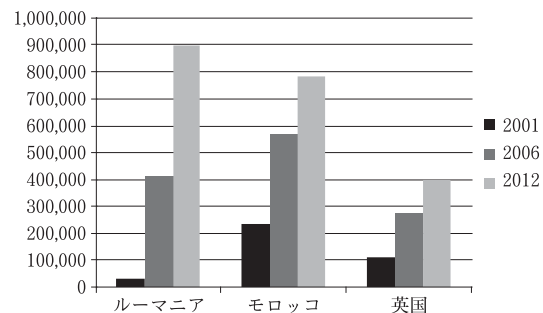
移民は、イスラムの世界からはモロッコが突出しており（図表6）、モロッコを含めたアフリカからの移民・難民問題への対処がことある毎に社会問題となってきた。

一方で、2000年代半ば以降は、当時のサバテロ政権が「文明の連帯」という形でのアラブ世界との連帯の政策を打ち出すなど、アラブ世界との関係強化（図表7）が推進されてきた。中でも、トルコとの連帯が強く意識されていた。スペインにとって、アフリカ地域でフランスやポルトガルに劣後している状況でそれを補完する地域として地中海地域、アラブ地域も重要になってきた。これに加えて、中東地域の資金力・オイルマネーが、バブル経済の崩壊したスペインにとって重要な存在になってきた事がある。

2000年代末にかけて、スペインでは、国内の貯蓄銀行（スペイン語でカハ [Caja] と呼ばれる）の再編が急速に進んだ。同国ではサン

図表6 スペイン移民の主要な出身国と移民数推移
（上位3ヶ国）

	2001	2006	2012
ルーマニア	32	407	896
モロッコ	233	563	783
英国	107	275	398
エクアドル	139	461	306
コロンビア	87	265	245
アルゼンチン	32	150	229
ドイツ	99	150	197
イタリア	35	116	192
ボリビア	7	140	185
ペルー	31	125	182



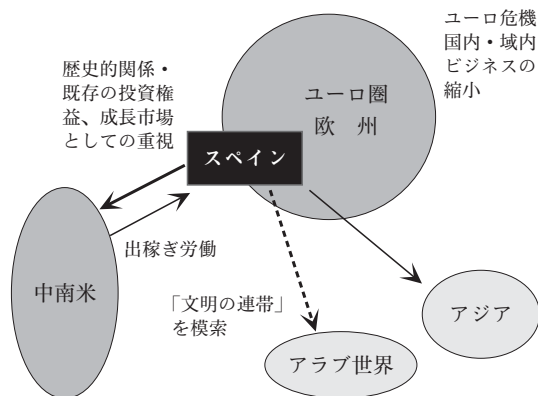
（出所） スペインのセンサスのデータベースより筆者作成
（注） 移民数の表の単位は千人

タンデール、BBVA（バンコ・ビルバオビスカヤ）などの国際的な銀行とは別に、貯蓄銀行が金融部門の中で重要な役割を担ってきたが、同国の不動産市場の悪化などを背景に貯蓄銀行の不良債権が急激に増加した。このような金融再編の中で、中東地域のオイルマネーが重要な出資者として常に期待されてきた。

また、近年スペイン企業が中南米地域でのビジネスを大きく拡大する中で、湾岸諸国の資金力が改めて注目されている。中南米地域では経済が安定する中で、ブラジルの新油田の発掘と開発のように多額の資金の投入を伴う大型プロジェクトも増えてきた。このような中で、格付が低下して相対的に資金調達能力が低下してきたスペイン企業にとっては単独で大きなリスクを取れないケースも増えてきた。また、中南米地域では依然として資源ナショナリズムが根強く残っており、国有化などの政治的なリスクも残っている。スペイン企業は実際にアルゼンチン（Repsol YPF のケース）やボリビア政府による国有化に直面している。このような中で、スペイン企業としてもリスク分散の意味で産油国との提携が不可欠になっている。サンタンデールがブラジル現法の持ち分の一部を中東のファンドに売却するなど今後もこのような動きが活発になっていく事が予想される。

このように、スペインは、モロッコ・トルコ・湾岸諸国など国によって異なっているが、イスラム世界と様々な接点を有してきた。

図表7 スペインにとっての「文明の連帯」の位置付け



(出所) 筆者作成

(3) イタリア（北アフリカからの難民問題への直面、マルタの位置付け）

イタリアの場合には、海外に多くの植民地を有してきたフランスやスペインとは状況は異なるが、最近では北アフリカからの難民が大きな問題となっている。「アラブの春」に伴う社会的混乱を恐れ、北アフリカや中東から欧州諸国に流入する難民が急増しており、地中海で難民を乗せた船が沈没する惨事も発生している。北アフリカからは、海路で最短距離のイタリアを目指すルートが一般的となっていて、難民にとってイタリアはEUへの玄関口となっている。シェンゲン協定が域内国境検査を廃止しているため、一旦イタリアからEU域内に入ってその後ドイツやスウェーデンなど北の国々に移動する難民も多く存在する。

この問題はイタリアに近いマルタにも共通する問題である。地中海の小国マルタは過去アラビア圏に属していた歴史もあって、マルタ語にはアラビア語の影響が強く残っている事が知られている。1987年の総選挙では、親西側路線への復帰を提唱する国民党が勝利し、労働党に代わって政権をついた。国民党は、EC加盟申請やマルタでの米・ソ首脳会談の開催等の外交上の実績、好調な経済を背景に、1990年代を通して政権を維持した。2003年の国民投票での賛成多数の支持を経て、2004年にマルタはEU加盟を実現、2008年にはユーロを導入するに至っている。欧州の中で地理的には最も北アフリカに近いマルタにとって、近年のアラブの春の混乱に伴って発生している難民は重大な問題である。

以上のように、EU・ユーロのマルタへの拡大、アラブの春の混乱によってイタリアやマルタが直面している難民問題は、ラテンとイスラムの接点の1つの側面に他ならない。

(4) ギリシャ（歴史的なオリエントとの接点、キプロス問題とトルコとの関係）

2010年代に入って表面化したギリシャの財

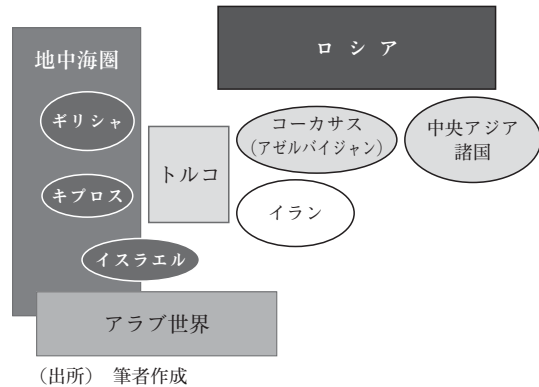
政の問題は、以後ユーロに危機的な状況をもたらした。しかしながら、歴史的に見ると、ギリシャ文明の東方拡大やペルシャとの衝突、その後のヘレニズム文化の誕生、東ローマ帝国・ビザンチン帝国、オスマントルコとの対峙などに象徴されるように、ギリシャはオリエント世界との接点の最前線に位置して、中心的な役割を担ってきた。しかしながら、近代・現代の歴史ではギリシャの欧州の中でのプレゼンスは低下してきた。現代のギリシャにとってはキプロス問題がイスラムとの接点として重要な意味を持っている。

キプロス問題は、1960年に英国よりキプロスが独立した時まで遡る。ギリシャ系住民とトルコ系住民の間で対立衝突が激化したため、1964年には国連が平和維持隊を派遣する事となった。1974年にはギリシャ軍事政権の支持を得たギリシャ系住民がクーデターを企図したのを機にトルコ軍がトルコ系住民の保護を名目に侵攻してキプロス北部を占領した。これ以降、キプロスは北部のトルコ軍支配地域（トルコ系）と南部のキプロス共和国政府支配地域（ギリシャ系）とに分断されてきた。この中でトルコ系の「北キプロス・トルコ共和国」は1983年に独立を宣言してトルコのみが承認を行った。

2004年に両地域の代表が国連の調停で交渉を開始、調停案が双方の地域での住民投票にかけられた。しかしながら、ギリシャ系地域で過半数の支持を得られず否決、キプロスの再統一は実現しなかった。その後は、キプロスをギリシャ系及びトルコ系の連合共和国とする事、大統領の輪番制、両系間の住民の移住制限、両系間の境界画定等を盛り込む内容の調停案が議論されてきた。このような懸案事項はあるものの、キプロスは2004年にはEUへの加盟が認められ、2008年にはユーロを導入している。以上のように、キプロスはマルタと同様にEUの南方拡大の象徴的な存在となっている。

他方で、キプロス問題は、トルコのEU加盟に向けての大きな障害ともなってきた。トルコ

図表8 トルコから見た世界



の視点から周辺諸国との位置関係を図式化したのが図表8である。トルコにとっては、ギリシャを始めとする南欧諸国との関係、キプロス問題、アラブ世界・イスラエルとの関係など外交上の重要な問題は地中海圏に集約されていると言っても過言ではない。他方、東方では、言語系統を同一にするアゼルバイジャン（コーカサス地域）や中央アジア諸国が重要な位置づけを占めている。これらの地域では、ロシアやイランのような大国と影響力の行使を競う構図となっている。

トルコと欧州の関係ではEU加盟問題が最も注目され、その際にはトルコの異質性が焦点となりがちである。キプロス問題も含めて地中海圏を中心にトルコの立場を考える事は、本稿のテーマであるラテンとイスラムの接点を具体的に考える事に他ならない。

3. ラテンとイスラムの接点を考える事の意義

最後に、ラテンとイスラムの接点を考える事の意義を述べて本稿の締め括りと致したい。両世界の接点としては、トルコのEUへの加盟問題が象徴的な問題だが、本稿で示したようにそれ以外に両世界には様々な接点がある。例えばキプロスやマルタのような小国は、国の規模や影響度の点ではEU・ユーロの東方拡大と比較すると目立たない存在だが、両世界の接点という意味では重要な意味を持っている。また、

近年のアラブの春では、イスラム圏諸国の動向自体がとかく注目されがちだが、北部アフリカ地域の情勢不安定化に起因する難民の問題の影響を最も強く受けるのはイタリア等の南欧諸国に他ならない。

筆者は銀行業務や調査を通じて様々な形でラテンの世界と約20年近くにわたって関わってきた。イスラムの世界については、約20年前にフランスに在住した際に、フランスとイスラム圏の接点の多さを痛感した。最近アラビア語やトルコ語の学習を始めた事が契機でイスラムの世界への興味を深めているが、ラテンとイスラムの世界の接点の多さを改めて痛感している。歴史研究の分野では地中海の括りで両者を統合的に捉える事は一般的であるが、政治・経済など現代の社会科学の分野では、ラテンとイスラムが異質な地域として分断されて研究されている印象がある。南欧諸国の地域研究では、2000年代以重要となってきたイスラム移民の問題は、移民の増加や異質文化との共存に苦悩する南欧諸国の社会問題として位置付けられる。その一方で、イスラム研究の視点ではイスラム移民が西欧社会で排除されている図式で捉えられがちである。このように既存の地域研究では、ラテンもしくはイスラムのどちらかの視点に立脚しがちになってしまう限界がある。

筆者としてはラテンの世界を統合的・多面的に捉える事を従来から問題意識として持ってきたが、本稿はその一環としてイスラム世界との様々な接点を整理するという位置付けである。本稿で言及した南欧諸国が直面する移民・難民問題は、様々な分野で既に多くの研究がなされている。本稿の趣旨は個々の問題の分析ではなく、総体的に見たラテンとイスラムの接点の多さを改めて整理する事にある。南欧諸国のイスラム世界との関わりは、「両価感情・両面価値的な関係」といった表現の方が実態をより反映しているように思われる。

今後、超長期的なスパンで見た場合に両世界の関係はどの程度深化していくのであろうか。おそらく、西欧の（旧社会主義圏への）東方拡

大と比べると、「西欧の南方拡大」にはかなり時間がかかるであろう。本稿において、「両世界の融合」ではなく「両世界の接点」という表現を使ったのは、このような点を踏まえてである。但し、それは単純な対立で括れるものではなく、両世界の融合に向けた模索でもあろう。今後の両者の関係の在り方への興味は尽きない。

《注》

- (1) 外国為替貿易研究会『国際金融』2013年11月号
- (2) 図の作成に際しては、ボニファス・ヴェドリーヌ「最新 世界情勢地図」(特に、第4部「それぞれから見た世界」)から多くの示唆を受けた。
- (3) この関連の重要な著作として、パート・ユーロの『ユーラシア — ユーロ = アラビア枢軸』(2005年)が挙げられる。
- (4) ギリシャ語はラテン系の言語群に属さず、普通はラテンの世界には含めない。また、南欧諸国とした場合にはフランスが含まれない事になるため、ここでは地中海圏の国々という表現を用いた。
- (5) 特定の対象に対して相反する感情を同時に持ったり、相反する態度を同時に示すことを指す心理学の概念。アンビバレンス (Ambivalence) という用語をそのまま用いる事も多い。

参考文献

- ・外務省のサイト (各国・地域情勢) [マルタ・キプロスの情勢]
- ・駐日欧州連合代表部のサイト イタリアの難民問題への対応 (<http://eumag.jp/behind/d1113/>)
- ・坂東省次 (編著)『現在スペインを知るための60章』、明石書店、2013年3月
- ・ボニファス・ヴェドリーヌ「最新 世界情勢地図」、ディスカヴァー・トゥエンティワン社、2011年4月
- ・松井謙一郎「ユーロ危機の諸相② (ユーロ周縁国の生き残り戦略) — アングロサクソン型とラテン型の対比を中心に —」、一般財団法人外国為替貿易研究会『国際金融』、2013年5月
- ・———「ユーロ危機の諸相③ (移民と住宅ローン問題) — スペインの移民と米国のヒスパニック移民の比較を中心に —」、一般財団法人外国為替貿易研究会『国際金融』、2013年6月
- ・———「『ラテンの世界』を見る視点 — 既存の縦割りの見方を超えて —」、一般財団法人外国為替貿易研究会『国際金融』、2013年11月